

名前の性別・年齢手がかりによるジェンダー・ステレオタイプの活性が文章評価に与える影響

The Impact of Gender Stereotype Activation by Gender and Age Clues in Names on Text Evaluations

松 尾 彩 加

Ayaka MATSUO

(日本女子大学大学院人間社会研究科 心理学専攻博士課程後期)

要 約

Goldberg(1968)を先行研究とし、女子大学生を対象に、名前によって筆者の性別・年齢手がかりを操作した文章の説得力評価を求める実験を行った。実験の意図が悟られにくいよう中立な分野(心理学)の課題文を用いた実験Ⅰでは筆者名が高齢女性のとき高い評価を受けることが示されたが、「男性的」な分野(工学)の課題文を用いた実験Ⅱでは名前による評価差は生じなかった。女性は分業システム上の役割から、他者との共同に利する特性を持つとみなされやすいことが知られる。実験Ⅰの課題文は心理療法の効果を論じたものであり、筆者が「カウンセラー」等の他者への共感が重視される職業であると想定する回答が多く挙げたことから、高齢女性に共同的特性を期待するジェンダー・ステレオタイプが実験Ⅰのトピックにおける高い説得力効果につながったと考えられる。

[Abstract]

This study, based on the work of Goldberg (1968), investigated the persuasiveness of texts where the author's gender and age were manipulated through their names. In Experiment I, it was observed that texts authored by elderly women received higher persuasiveness ratings from female university students when the topic was about neutral field (psychology). However, in Experiment II, using a more "masculine" field (engineering), no evaluation differences were observed based on the author's name. It is known that women are often associated with collaborative and nurturing traits due to their roles in the gendered division of labor. The text in Experiment I discussed psychotherapy, which might have led many participants to assume the author was a "counselor" or a similar profession, where empathy toward others is emphasized. These findings suggest that the gender stereotype of expecting "communion" from elderly women led to higher persuasiveness ratings in Experiment I.

1. 目的

日本では、1985年に男女雇用機会均等法、1999年に男女共同参画社会基本法が制定された。これらに伴い、ジェンダー平等が目指されるべき理想であること、あるいは性差別が倫理的に許されないものであるということは社会に共有されて久しいはずである。しかし、今日も性差別を根底とした社会問題は起こり続けている。この理想と現実の乖離をもたらす要因の1つとして、能力や特性についての性に基づく単純化された情報ネットワークであるジェンダー・ステレオタイプに「活性」と「適用」及び「知識」と「信念」の違いがあることが挙げられる(土肥, 2008)。

Devine(1989)は、文化的なステレオタイプ知識を持つことと、それらを真実として支持する信

念を持つことを区別し、ステレオタイプ知識の活性による自動的過程と個人的信念の適用による統制的過程が独立に機能することを検証した。この「活性」と「適用」の区別はジェンダー・ステレオタイプ研究においても検討されている。例えば、野寺・唐沢(2004)はプライミングによる語彙判断課題と質問紙による男女平等主義的態度の測定を用いて、これを検討している。この研究では、まず、ネガティブまたはポジティブなジェンダー・ステレオタイプ語や無意味つづりを含む文字つづりについて、意味の有無を問う語彙判断課題が行われた。これは、ベースラインとなるジェンダー・ステレオタイプ語への反応時間の測定を目的とするものである。その後、男女いずれかの顔写真を250ms間提示するプライミングを用いた語彙判断課題を行い、ベースラインとの反応時間の差を反応促進量として算出している。その結果、女性に対するネガティブなステレオタイプ語の判断は男性の顔写真を提示した場合よりも女性の顔写真を提示した場合に促進され、男性に対するネガティブなステレオタイプ語の判断も女性の顔写真を提示した場合よりも男性の顔写真を提示した場合に促進されることが明らかとなった。しかし、質問紙によって表明される平等主義的な態度の高低による反応促進量の違いは認められなかった。これらの結果は、ジェンダー・ステレオタイプにおいても、プライミングによって生じる「活性」と、質問紙によって表明される顕在的な態度の「適用」が異なる過程であることを示唆するものと考えられる。

また、ジェンダー・ステレオタイプの「活性」と「適用」の違いに対応する「知識」と「信念」の違いは発達研究を中心に議論されてきた。Signorella et al.(1993)は子どもを対象としたジェンダー・ステレオタイプ研究において、特定の刺激に対応すると思う性別を1つだけ選ぶ強制選択課題では年齢とともにステレオタイプに合致した反応が増加するのに対し、複数の性別を選ぶことができる非強制選択課題では年齢とともに「男女どちらも」といった反応が増加する傾向にあることを指摘した。そのうえで、強制選択課題は知識の側面を、非強制選択課題は態度的側面を引き出すために、異なる変化収束過程が描かれるのではないかと考察している。同様の知見は複数の研究から示唆されており、3～5歳にかけて著しくジェンダー・ステレオタイプ知識を獲得する一方、性の恒常性に関する理解の獲得や自分自身のジェンダー・アイデンティティの確立に伴い、ステレオタイプに対する態度は徐々に柔軟性や個人差を帯びていくと考えられている(e.g., Kohlberg,1968; Serbin & Sprafkin,1986; Golombok & Fivush, 1994; 相良, 2008)。近年においても、知識と支持の区別を明確にした実験デザインを用いた研究では、ジェンダー・ステレオタイプについて知っていること(知識)と支持すること(信念)が異なる次元で個人内に存在することを示唆する結果が得られている(e.g., Wood et al., 2022)。

これらを踏まえると、ジェンダー・ステレオタイプについての知識は発達早期に獲得されるものであり、後にそれらを支持しない個人的信念を確立したとしても、その活性によって、個人的信念の関与しない領域で特定の性別集団に不利な判断が生じてしまうことが想定できる。ステレオタイプの活性という概念が提唱されて以降、各性別と刺激語の連合強度をキー押しの反応時間の差から測定するIAT(Implicit Association Test; 潜在連合テスト)やプライミングといったアプローチによる検討がさかんに行われてきた(野寺・唐沢, 2004)。しかし、それらは厳密に統制された刺激を用い、実験室などの非日常的環境下で測定されるものであることから、現実社会に存在する性別間の非対称的構造の理解に応用するには制約があると考えられる。では、より生態学的に妥当な文脈において、ジェンダー・ステレオタイプの活性がもたらす影響を検討するには、どの

ような手法があるだろうか。

Goldberg(1968)は、女子大学生を対象に名前によって筆者の性別手がかりを操作し、ステレオタイプの的に男性と連合の強い学問分野(法学・都市開発)、女性と連合が強い学問分野(初等教育・栄養学)、どちらも結びつかない中立な学問分野(言語学・芸術史)の文章を読ませ、説得力や筆者の専門性の高さを評価させる実験を行った。その結果、全体的に筆者が男性であるとき女性であるときより高い評価を受けやすく、男性的な分野2つと中立な分野1つでは統計的に有意なレベルで男性が高く評価されることが示された。その後、この手法は多くの研究に引き継がれ、その効果量や使用する名前の交絡的影響が議論を呼びながらも(e.g., Swim et al., 1989; Kasof, 1993)、様々な知見をもたらしている。例えば、同じく名前によって性別情報を操作し就職志願者への評価を検討したUhlmann & Cohen(2005)は、質問紙によって測定された性差別に対する顕在的な態度はステレオタイプの的な評価を予測しないことを明らかにしており、これらの手法がジェンダー・ステレオタイプのより無意識的側面、すなわち、その活性にアプローチするものであることを示唆する。

この一連の結果は、日常において、使用を避けたり変更したりすることが難しい名前のような刺激に含まれる性別手がかりによってもジェンダー・ステレオタイプが活性化し、特定の性別に不利な評価をもたらすことを示した点で、現実社会において性別間の非対称的構造が再生産されるしくみの理解に貢献するものと評価できる。しかし、日本において名前によって性別手がかりを操作し、ジェンダー・ステレオタイプが他者評価に与える影響を検討したものはほとんど見当たらない。また、Kasof(1993)は、Goldberg(1968)を含む名前を操作する形でジェンダー・ステレオタイプを検討した研究について、年齢などの名前の持つ性別以外の印象が結果に影響していることを指摘している。そもそも、現実社会において、人々が単に性別情報のみからなるステレオタイプをもとに様々な評価を行っているとは考えにくい。ステレオタイプが生じる背景には、ある特徴を持つものを他と区別して分類するカテゴリー化のプロセスが存在するが(上瀬, 2002)、人種や性別と並び年齢もカテゴリー化に用いられやすい基準の1つであるとされる(Horowitz & Horowitz, 1938)。したがって、本研究は、現実社会において性別間の非対称的構造の理解に貢献することを目指して、Goldberg(1968)の日本での追試を行い、名前から示される年齢手がかりも操作し、年齢と性別という2つの特徴によってカテゴリー化される集団に対して持たれるステレオタイプが説得力評価に与える影響について検討することとした。

2. 実験 I

実験 I では、現実社会における性別間の非対称的構造の理解に寄与することを目的に、Goldberg(1968)に年齢手がかりの操作を加え、ジェンダー・ステレオタイプが文章の説得力評価に与える影響を検討した。また、Goldberg(1968)では、一方の性別と連合の強い分野と中立な分野での検討が行われているが、実験 I では中立な分野のみでの検討を行う。これは、明確に一方の性別との連合を持つ分野では実験の本来の意図が汲まれ、「社会的望ましさ」などから現実場面に即さない結果が得られる可能性が高いのに対し、表面的に中立であることが想定される分野では意識的な統制を受けにくく、より現実場面における性別間の非対称的構造が反映されやすいと予測したためである。

2.1 仮説

Goldberg(1968)を下敷きとした最新の研究の1つであるKlaas & Boukes(2020)は、時代の変化に伴い、ジャーナリズムの領域に進む女性の割合が増加したことや、実験参加者の世代や性別の違いによる影響の検討を目的に、幅広い世代の男女を対象とした実験を行っている。この研究では、ジャーナリストの性別が名前と顔写真によって操作された。一方の性別に連合の強いトピックとして、テクノロジー（「男性的」なトピック）とファッション（「女性的」なトピック）に関する記事が提示され、参加者はその記事の信頼性を評価した。その結果、現代においてもなお、連想されるジャーナリストの性別が女性であるとき、男性であるときより、信頼性が低いと評価されることが明らかとなった。特に、女性によって書かれたテクノロジーに関する記事は全体で最も信頼性が低いと評価された。しかし、ファッションに関する記事では性別による評価差がみられず、「男性的」なトピックにおいてのみ筆者の性別が重視され、結果的に女性ジャーナリストだけが、なおもジェンダー・ステレオタイプに基づく不当な評価を受けていることが示唆された。日本のジェンダー・ギャップ指数（世界経済フォーラム, 2021）の総合スコアは、この研究の対象地域と比較してより不平等に近い値を示していることから、日本の女子大学生を対象とした場合においても、筆者名から示される性別手がかりが男性である場合、女性である場合よりも高い評価を受けると考えられる。

そのうえで、40歳未満の大学教員の割合はわずか22.1%であることや（文部科学省, 2019）、職業に限定されず、勤続年数に応じて賃金が上昇する傾向にあり、時間的経過に伴い必要な能力や専門性が蓄積されるという考えが共有されていることから（厚生労働省, 2013）、筆者名が高齢であるとき、より高い説得力をもって評価されることが予想される。また、少数派集団に属する女性は二重の偏見を受け、より複雑な差別を受けるとの指摘もある（鈴木・柏木, 2006）。すなわち、若年女性は「女性」であることに加え、「若年層」という少数派集団にも属していることになり、筆者名が女性であるとき、年齢の増加に伴い上昇する評価の幅も大きいことが予測できる。したがって、仮説は以下の通りである。

H₁: 筆者が男性であるとき、女性であるときより、説得力があると評価される。

H₂: 筆者が高齢であるとき、若齢であるときより、説得力があると評価される。

H₃: 筆者が女性であるとき、男性であるときより、年齢の説得力への影響が増す。

2.2 方法

研究日時・実験協力者: 2021年7月に都内女子大学の授業内で協力を呼びかけ、協力への同意を得られた女子大学生73名 ($M=19.6$ 歳, $SD=1.13$)を対象に行った。

刺激: 「EMDRのPTSDへの治療効果について」というタイトルに若年女性・高齢女性・若年男性・高齢男性いずれかの手がかりを示す名前を付与した文章(546文字)を、A4用紙に印刷して使用した。

国内の大学等の機関における研究者の男女比に偏りが小さいことを根拠に（総務省統計局, 2014）、一方の性別と強い連合を示さない分野として心理学領域の課題文を用いることとした。主題は実験協力者の事前知識の有無が評価に影響しづらいよう、その是非について意見の二分が見ら

れるものであることを第一に考慮し、PTSD (Post Traumatic Stress Disorder; 心的外傷後ストレス障害) に対する心理療法の1つとして知られるEMDR (Eye Movement Desensitization and Reprocessing; 眼球運動による脱感作と再処理法) を選択した (佐々木, 2015)。そのうえで、EMDR の効果について意見の二分が見られること、筆者がその効果を支持する立場であることを明示するオリジナルの文章を作成した。

筆者名として使用する名前は事前調査をもとに決定した。この事前調査では、明治安田生命による各年代別の名前ランキングを川岸 (2013) より参照し、2021年時点で70歳と30歳にあたる1951年生まれと1991年生まれの新生児に多くつけられた名前から、10年後以降あるいは10年前以前にもランクインしているものについては、世代に関わらず普遍的な人気を示し、明確な年齢手がかりを暗示しない名前として選定対象から除外した。残ったものの中から上位5つについて、本実験の実験協力者である女子大学生と同年代の女性30名 ($M=21.03$, $SD=1.02$) を対象に、それぞれの名前が持つ性別と年齢の印象をたずねた。性別の印象についてはSD法 (男性的-女性的) の7件法を用い、年齢の印象については10代～80代のうち最もふさわしいと感じる年齢層を、それぞれ回答させた。その結果、全ての名前がランクインしているランキングの性別と対応した印象を与えることを確認した。そこで、年齢層評定のうち、20代～30代 (若年層)、60代～70代 (高齢層) のいずれかに最頻値があり、その割合が最も高い名前を各性別についてひとつ選定した。また、姓から受ける印象の違いによって名前全体の印象に影響が出ないように、全ての筆者名に日本でごく一般的な姓の1つである「高橋」を採用した。以上の操作を踏まえて、使用する筆者名は①高橋麻衣 (若年女性名条件) ②高橋節子 (高齢女性名条件) ③高橋翔 (若年男性名条件) ④高橋和夫 (高齢男性名条件) に決定した。

手続き：実験は被験者間計画で実施し、実験協力者は各4条件のいずれかに割り当てられた。各条件の人数は、若年女性名条件20名、高齢女性名条件17名、若年男性名条件19名、高齢男性名条件17名であった。

実験にあたっては、課題文が印刷された調査用紙を配布し、「この調査は、視覚的により説得力を感じやすい文章の提示方法について検討するために行うものです。知識の有無を測るためのものではありません。正しい答えや、間違った答えというものはありません。思った通りに回答してください」と教示した。実験協力者は課題文を読み、「EMDRはPTSD症状への治療に有効であると思う」という問いに、1 (全くそう思わない) ～6 (非常にそう思う) のいずれかを選択して回答した。

その後、回答の済んだ者から順に、調査後アンケートを配布した。このアンケートでは、課題文内に登場した「EMDR」と「PTSD」という2つの用語についての事前知識と、実験協力者が想定した筆者の性別・年齢・職業をたずねた。事前知識の有無については、「1. 知っていた」「2. よく知らないが聞いたことはあった」「3. 知らなかった」のうちから、筆者の性別については、「1. 男性」「2. 女性」のうちから、当てはまる数字を1つ選び、回答するよう求めた。想定年齢は2桁の数字で、想定職業は具体的な職業名を自由記述で、それぞれ回答させた。なお、アンケートの内容から実験の本来の意図を悟られ、事前の回答内容が修正されることがないように、調査後アンケートの配布と同時に調査用紙は回収した。

2.3 結果と考察

調査後アンケートで尋ねた課題文中の2つの用語についての事前知識を得点化し、平均得点について一要因分散分析を実施したところ、有意差はなかった(EMDR： $F(3,69)=2.01, p=.121$; PTSD： $F(3,69)=1.68, p=.179$)。

よって、条件間で実験協力者の事前知識に偏りはないとみなし、条件ごとの説得力得点を算出した(図1)。説得力得点について、2(性別：女性・男性) \times 2(年齢：若年・高齢)の二要因分散分析を行った結果、性別の主効果は有意でなかった($F(1,69)=0.26, p=.610$)。しかし、年齢の主効果と、年齢と性別の交互作用は、いずれも有意傾向となった(年齢の主効果： $F(1,69)=3.62, p=.061$; 交互作用： $F(1,69)=3.18, p=.079$)。そこで下位検定を行ったところ、女性名条件における年齢の単純主効果が有意となり、高齢女性名条件の説得力得点の方が、若年女性名条件の説得力得点より高かった(高齢女性名条件： $M=4.71, SD=1.05$; 若年女性名条件： $M=3.95, SD=0.59$; $F(1,69)=6.88, p=.011$)。一方で、男性名条件における年齢の単純主効果は有意でなかった(高齢男性名条件： $M=4.24, SD=0.75$; 若年男性名条件： $M=4.21, SD=0.98$; $F(1,69)=0.01, p=.933$)。

次に、調査後アンケートにおいて回答を求めた実験協力者が想定した筆者の性別・年齢・職業に関する回答をまとめた。各条件の筆者名の性別水準と調査後アンケートで実験協力者が想定した性別の一致率を算出した結果、若年女性名条件45.0%，高齢女性名条件76.5%，若年男性名条件42.1%，高齢男性名条件76.5%であった。想定年齢の平均値は、若年女性名条件39.2歳，高齢女性名条件37.0歳，若年男性名条件34.3歳，高齢男性名条件36.5歳であった。各条件の平均想定年齢について一要因分散分析を行ったが、有意差は見られなかった($F(3,69)=0.73, p=.540$)。想定職業に関する回答は自由記述形式であったため、主に回答の多かった4つの職業と、「その他」の5つに分類した(表1)。「精神科医または心理カウンセラー」のように重複した回答は「医師」と「心理職」それぞれにカウントした。全体では、臨床心理士・公認心理師を含む「心理職」が最も多く、次いで「医師」、「研究者・教授」、「学生」であった。

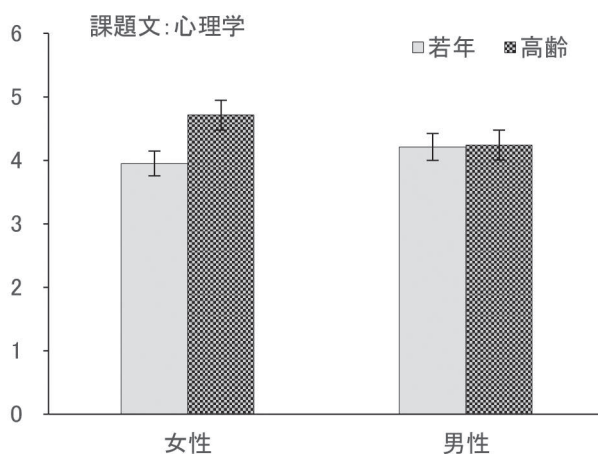


図1 実験 I における条件別平均説得力得点

注) グラフの縦軸は説得力得点、エラーバーは標準誤差を示す。

表 1 実験 I における条件別想定職業回答件数 (%)

想定職業	条件名				合計
	若年女性名条件	高齢女性名条件	若年男性名条件	高齢男性名条件	
心理職	7 (35.0)	7 (36.8)	10 (50.0)	6 (33.3)	30
医師	6 (30.0)	5 (26.3)	2 (10.0)	5 (27.8)	18
研究者・教授	4 (20.0)	2 (10.5)	2 (10.0)	5 (27.8)	13
学生	1 (5.0)	3 (15.8)	1 (5.0)	2 (11.1)	7
その他	2 (10.0)	2 (10.5)	5 (25.0)	0 (0.0)	9
合計	20	19	20	18	77

注) () 内の数字は各条件の合計回答件数に占める割合を表す。1 人が複数の職業を回答した場合はそれぞれにカウントしたため、各条件の合計回答件数は実験協力者数に対応しない。

以上より、説得力得点に対する性別の主効果は有意でなかったことから、「H₁：筆者が男性であるとき、女性であるときより、説得力があると評価される。」は支持されなかった。しかし、年齢の主効果と年齢と性別の交互作用には有意傾向がみられ、女性名条件における年齢の単純主効果は有意となり、高齢女性名条件の方が若年女性名条件より説得力得点が高かったことから、「H₂：筆者が高齢であるとき、若年であるときより、説得力があると評価される。」は女性名条件において部分的に支持されたといえる。したがって、「H₃：筆者が女性であるとき、男性であるときより、年齢の説得力への影響が増す。」も支持されたといえ、年齢の効果は女性において特に顕著であることが示唆された。

先行研究の結果とは異なり、「H₁：筆者が男性であるとき、女性であるときより、説得力があると評価される。」が支持されなかったことから、実験協力者である女子大学生らがジェンダー・ステレオタイプに基づく評価は行っていない可能性が示唆された。また、割り当てられた性別・年齢水準と対応しない回答が多かったことから、そもそも実験協力者が名前から年齢や性別といった情報を受け取っていなかった可能性も考えられる。しかし、女性名条件においてのみ、年齢の単純主効果が有意となり、「H₃：筆者が女性であるとき、男性であるときより、年齢の説得力への影響が増す。」が支持されたことから、実験協力者である女子大学生らが名前から受ける性別情報に基づく評価を行っていないとは断言できず、年齢手がかりをふまえて形成された、より複合的なステレオタイプが評価に影響していた可能性を検討する必要がある。

高齢女性名条件においてのみ、説得力得点が高まり、主張への賛同を得やすかった理由として、特定の性別と連合しないと想定していた課題文のトピックが実際には中立ではなく、高齢女性に求められる社会的役割から推論される特性に有利なものであった可能性が考えられる。社会的役割理論 (Eagly & Wood, 2012) によると、ジェンダー・ステレオタイプは分業化された社会内での人々の行動の観察と、その行動に対応した特性の推論から生じるとされる。すなわち、性別役割分業というシステムのもと、育児などの他者をケアする役割を担う女性を観察することで、人々は本質的に女性はその役割に適した共同的特性を備えていると推論する。同様に、外で働き、決定権のある地位を占める男性を観察することで、本質的に男性がその役割に適した作動的特性を

備えていると推論する。ジェンダー心理学において、共同性 (communion) は優しさや共感性のような他者との相互依存的関係の中で発揮される特性を指し、作動性 (agency) はたくましさや行動力のような一個人が独立して生きる中で発揮される特性を指す (青野, 2022)。性別役割分業及びジェンダー役割が結婚や妊娠・出産に起因して顕著になることを踏まえると、「妻」あるいは「母親」という役割に代表される高齢女性に対して、特に他者をケアする役割に見合う特性を付与しやすいことが想定できる。すなわち、研究者の男女比の偏りが小さいことを根拠に心理学領域を中立な分野とみなして課題文を設定したが、より具体的には「EMDRのPTSDへの治療効果について」というタイトルの臨床的实践に関する文章であったため、その職業適性と高齢女性に対するジェンダー・ステレオタイプのマッチングにより、高齢女性名条件の高い説得力効果が生じたと考えられる。このことは、調査後アンケートでの想定職業に関する設問において、心理職や精神科医といった心のケアを担うような職業が回答の半数を占めていたことから示唆される。

これらの結果は、実験協力者である女子大学生らが、男性の優位性をその能力の高さと結びつけるようなジェンダー・ステレオタイプに基づく評価は行わないものの、一見すると問題意識を抱きにくい形で、高齢女性にケア役割に見合う特性を付与するようなジェンダー・ステレオタイプに基づく評価を行っていたことを示しているのかもしれない。しかし、実験Ⅰの高齢女性名条件で使用了名前が、他の3条件で使用了名前と比較して、性別・年齢手がかりとは別の信頼感につながるような特別な魅力を持っていた可能性なども否定できない。したがって、高齢女性名条件においてみられた高い説得力がトピックに限定的なものであるのか、さらなる検討を行うべく、男性との連合が強い分野の課題文を用いて、実験Ⅱを行うこととした。

3. 実験Ⅱ

実験Ⅰでは、Goldberg (1968) を先行研究として、名前により筆者の性別・年齢手がかりを操作した文章の説得力評価を求める実験を行った。その際、刺激として用いた課題文は、社会的望ましさなどからくる回答の歪みを排し、より現実場面に即した結果を得られるよう、特定の性別とも連合しないことが想定される心理学分野のものであった。その結果、女性名条件において年齢の単純主効果が有意となり、高齢女性名条件のみが有意に高い評価を受けた。こうした結果が生じた背景について検討することを目的に、実験Ⅱでは、男性と連合が強いことが想定される分野の課題文を用いて同様の手続きの実験を行った。

3.1 仮説

社会的役割理論 (Eagly & Wood, 2012) や想定職業に関する回答から、高齢女性名条件においてみられた高い説得力は、実験Ⅰで用いた課題文のトピックが高齢女性に与えられる社会的役割から推論される特性に有利であったために生じていた可能性が示唆された。このとき、高齢女性の社会的役割に基づくジェンダー・ステレオタイプが有利に作用しない男性と連合の強い分野で、この効果は消失することが予測される。したがって、実験Ⅱの仮説は以下の通りである。

H4: 男性との連合が強いトピックでは、高齢女性名条件の説得力効果が消失する。

3.2 方法

研究日時・実験協力者：2021年11月から12月にかけて都内女子大学の授業内で協力を呼びかけ、協力への同意を得られた女子大学生85名 ($M=19.4$ 歳, $SD=1.07$)を対象に実施した。

刺激：「火星移住計画の実現性について」というタイトルに実験Iと同様の筆者をそれぞれ付与した文章(671文字)をA4用紙に印刷して使用した。

男性との連合が強い分野として、工学(応用科学)分野に関する文章を用いた。これは、先行研究において「男性的」なトピックとして、テクノロジーに関する内容が使用されていることや(Klaas & Boukes, 2020)、STEM(Science, Technology, Engineering, and Mathematics)領域における女性の割合の低さは国内外でも広く問題視されていることから(森永, 2017)、男性と連合の強い分野であると判断したことによる。主題の選定や文章構成にあたっては実験Iとの対称性を第一に考慮し、賛否が分かれていることを明示したうえで、火星移住計画が実現すると考える立場であることを主張するオリジナルの文章を作成した。

手続き：各条件の人数は、若年女性名条件20名、高齢女性名条件22名、若年男性名条件22名、高齢男性名条件21名であった。

実験Iと同様に「視覚的により説得力を感じやすい文章の提示方法について検討する」ものであり「知識の有無を測るためのもの」ではないと教示したうえで、課題文が印刷された調査用紙への回答を求めた。なお、説得力を問う設問については、実験Iと同様の形式で「火星移住計画は実現すると思うか」とたずねた場合、実験協力者の本来的な価値観等の違いが反映されてしまい、刺激から受ける純粋な説得力の計測が難しいと考え、「文章中の筆者の主張には説得力があるか」を問う形式へと変更した。その他、調査後アンケートにおいて事前知識を問う用語を課題文に応じて「火星移住計画」「MOXIE(Mars Oxygen In-situ Resource Utilization Experiment; 火星酸素現地資源利用実験)」に変更した以外は、概ね実験Iと同じ手順・形式であった。

3.3 結果と考察

課題文中の2つの用語についての事前知識の偏りを確認したところ、「火星移住計画」に関しては有意な偏りは見られなかったが($F(3, 78)=1.09, p=.358$)「MOXIE」については、高齢女性名条件の「よく知らないが聞いたことはあった」と回答した3名を除き、全員が「知らなかった」と回答したため、この3名のデータを除外することで統制を図った。したがって、最終的な人数は、若年女性名条件20名、高齢女性名条件19名、若年男性名条件22名、高齢男性名条件21名となり、計82名のデータを分析対象とした。

各条件の平均説得力得点を算出し(図2)、説得力得点について、2(性別：女性・男性) \times 2(年齢：若年・高齢)の二要因分散分析を行った。その結果、性別の主効果、年齢の主効果、交互作用いずれも有意でなかった(性別の主効果： $F(1, 78)=1.00, p=.321$; 年齢の主効果： $F(1, 78)=0.08, p=.777$; 交互作用： $F(1, 78)=0.57, p=.452$)。

次に、調査後アンケートにおいて回答を求めた実験協力者が想定した筆者の性別・年齢・職業に関する回答をまとめた。割り当てられた性別水準と実験協力者が回答した性別の一致率は、若年女性名条件80.0%、高齢女性名条件68.4%、若年男性名条件81.8%、高齢男性名条件90.5%であった。想定年齢の平均値は、若年女性名条件30.4歳、高齢女性名条件40.7歳、若年男性名条件

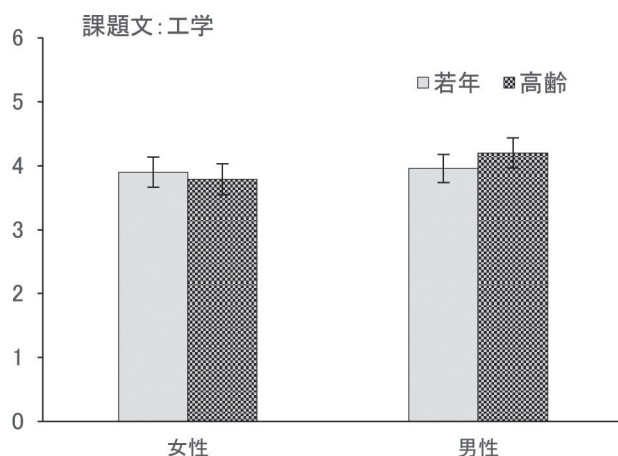


図2 実験Ⅱにおける条件別平均説得力得点

注) グラフの縦軸は説得力得点、エラーバーは標準誤差を示す。

表2 実験Ⅱにおける条件別想定職業回答人数(%)

想定職業	条件名				合計
	若年女性名条件	高齢女性名条件	若年男性名条件	高齢男性名条件	
宇宙関係	3 (15.0)	5 (26.3)	8 (36.4)	7 (33.3)	23
研究者	7 (35.0)	3 (15.8)	7 (31.8)	5 (23.8)	22
学生	8 (40.0)	1 (5.3)	4 (18.2)	2 (9.5)	15
メディア関係	0 (0.0)	4 (12.1)	1 (4.6)	2 (9.5)	7
教授	1 (5.0)	2 (10.5)	0 (0.0)	3 (14.3)	6
宇宙関係を除く 特定領域の研究者	1 (5.0)	1 (5.3)	1 (4.6)	2 (9.5)	5
その他	0 (0.0)	3 (15.8)	1 (4.6)	0 (0.0)	4
合計	20	19	22	21	82

注) () 内の数字は各条件の合計回答人数に占める割合を表す。

35.9歳、高齢男性名条件41.8歳であった。各条件の平均想定年齢について一要因分散分析を行ったところ、条件の主効果が有意となった($F(3, 78)=4.50, p=.006$)。多重比較(Holm法)の結果、若年女性名条件の平均想定年齢が、高齢女性名条件と高齢男性名条件の平均想定年齢よりも有意に低かった(若年女性名条件-高齢女性名条件: $t(78)=-2.93, p_{adj}=.023$; 若年女性名条件-高齢男性名条件: $t(78)=-3.31, p_{adj}=.009$)。

調査後アンケートにおける想定職業の回答は実験Ⅰ同様、自由記述形式であったため、回答の多かった6つの職業と「その他」の7つに分類した(表2)。「宇宙学の研究者」や「NASAの研究員」

といった回答を「宇宙関係」、領域を限定しない「学者」などの回答を「研究者」、「植物学者」などの回答を「宇宙関係以外の特定領域の研究者」とした。全体では「宇宙関係」が最も多く、条件別でも、若年女性名条件以外では最も多い回答であった。次いで、男性名条件はともに「研究者」が多く、高齢女性名条件は「メディア関係」となった。若年女性名条件は他の条件と異なり「学生」が最も多く、「宇宙関係」は15.0%にとどまった。

以上より、実験Ⅱにおいては、年齢の主効果、及び年齢と性別の交互作用のいずれも有意でなかったことから、「H₄：男性との連合が強いトピックでは、高齢女性名条件の説得力効果が消失する」は支持された。したがって、実験Ⅰでみられた高齢女性名条件の説得力効果は、課題文のトピックが高齢女性の社会的役割から推論される特性に有利であったために生じたものである可能性が高い。

一方で、課題文のトピックが異なる実験Ⅱにおいても、実験Ⅰと同様に性別の主効果は有意でなかった。このことは、実験協力者である女子大学生が、一般的に「男性的」とみなされやすい分野であっても、筆者が男性であるというだけで、文章の信頼性を高く見積もることはしないことを示しているといえる。

調査後アンケートの結果については、想定性別の一致率が全ての条件で6割を超え、想定年齢についても条件間で差がみられた。この点も実験Ⅰの結果との大きな違いであり、課題文のトピックが実験協力者の筆者名への注意の向け方に何らかの影響を及ぼしていたことが推察される。

4. 総合考察

本研究は、現代の日本の女子大学生を対象にGoldberg(1968)の追試を行い、どのようなジェンダー・ステレオタイプが共有され、それがどのような人々の不利益へとつながっているかを検討したものである。現実社会における性別間の非対称的構造の理解に寄与することを目的に日常場面との連続性を持った検討を目指し、名前から暗示される性別と年齢を操作した実験を行った。実験Ⅰでは、中立な分野(心理学)に関する課題文を用いて筆者の主張の説得力を検討した。その結果、女性名条件においてのみ文章の説得力得点に年齢の効果がみられ、筆者の名前が高齢女性を暗示する場合、若年女性を暗示する場合よりも説得力が高まることがわかった。実験Ⅱでは、実験Ⅰの結果がトピックに限定的なものであったのか検討すべく、男性と連合することが想定される分野(工学)の課題文を提示し、筆者の主張にはどの程度説得力があるか回答を求めた。その結果、文章の説得力には筆者の性別と年齢がともに影響を与えないことが明らかとなった。

本研究の特筆すべき結果として、中立な分野と想定した心理学に関する文章の評価において、高齢女性名条件のみが高い評価を受ける傾向にあったことが挙げられる。この高齢女性に対する肯定的評価は、一見、保守的な男女間の非対称的構造が解消し、女性の地位が向上した結果であるようにも思える。しかし、男性と連合が強いとされる工学分野での追試を行った実験Ⅱでは同様の結果は得られなかった。このことから、実験Ⅰでの高齢女性に対する肯定的評価は、社会的役割理論(Eagly & Wood, 2012)に説明されるように、分業システム上の役割から高齢女性に対して共同性を期待するようなジェンダー・ステレオタイプを抱きやすく、それが他者に対する共感

や受容が重視される専門分野においては説得力を強める形で機能したために生じたものと考えられる。

社会的役割理論の提唱者であるイーグリィも、ジェンダー・ステレオタイプと男女に対する態度の関連を検討した研究において、大学生が男性よりも女性を肯定的に評価する傾向にあったことを報告し(Eagly & Mladinic, 1989), 分析の結果, 肯定的評価が見られたのは優しさや他者への配慮のような共同性にまつわる項目であったとしている(Eagly & Mladinic, 1994)。また, 専業主婦(夫)あるいはフルタイム労働であると説明された男女と職業が明されていない男女に対して, どの程度優しさや温かさのような共同的特性, 及び積極性や独立性のような作動的特性が付与されるのかを検討した研究では, 男女ともに専業主婦(夫)の場合はフルタイムで働く人よりも共同性が高く作動性が低いとみなされ, フルタイムで働く人の場合は作動性が高く共同性が低いとみなされることがわかっており(Eagly & Steffen, 1984), その特性についての判断が社会的役割に強く左右されることが示されている。これらを踏まえ, Eagly & Mladinic(1994)は, 女性に対する肯定的評価は女性と家庭内の役割の密接な関連の反映であり, その地位の向上を意味しないことを指摘している。したがって, 本研究の結果も, 高齢女性とその家庭内の役割の結びつきの強さを反映したものといえ, 女性は他者をケアすることに優れるといったジェンダー・ステレオタイプが現代においてもなお共有されていることを示しているものと考えられる。

また, 本研究では, 先行研究(Klaas & Boukes, 2020)の結果に反し, 男性と連合が強いことが想定される工学分野の課題文を用いた実験Ⅱにおいても, 性別の主効果が有意でなく, 男性名条件が高く評価されることはなかった。このことは, 実験協力者にとって, 課題文のトピックが男性と結びつきを持たなかったことを示しているのかもしれない。しかし, 調査後アンケートの結果を踏まえると, 実験協力者が男性との結びつきを感じ取ったうえで, それを評価に反映させなかった可能性も考えられる。

実験Ⅱの調査後アンケートの結果を見ると, 男性名条件では性別の一致率が高く, 女性名条件では, 若年女性名条件において性別と年齢の一致率が高いことがわかる。この男性名条件の想定性別の一致率の高さは, 実際の筆署名の印象とは無関係に, トピックが「男性的」であったという認識から, 筆者の想定性別についても「男性」を選択した結果として, 一致率が偶発的に上昇したのと考えられる。一方で, 若年女性名条件は性別・年齢ともに水準に一致した回答が多いことから, 「麻衣」という筆署名そのものが実験協力者の注意を引いていたと推察され, 工学分野のトピックに関する文章の筆者が若い女性であることは, 実験協力者にとって意外性のあるものであったことが窺える。若年女性名条件が, 実験協力者に, 他の3条件とは異なる印象を与えていたことは, 想定職業に関する回答からも示されており, 他の3条件では「宇宙関係」の職業が最も多かったのに対し, 若年女性名条件でのみ「学生」が最も多い回答であった。

これらのことは, 実験協力者たちが, 課題文のトピックを「男性的」とであるとみなし, かつ若年女性にはこのトピックの筆者としてのプロフェッショナリズムを想定しないようなジェンダー・ステレオタイプ知識が活性化された状態に置かれながらも, 意識的な抑制によって, 男性を高く評価したり, 若年女性を低く評価したりすることを回避していたことを示しているのかもしれない。実際, 調査後アンケートの想定性別を記入する欄に「筆者の性別を気にすることはない」という旨の回答をした実験協力者もあり, ジェンダー・ステレオタイプに基づく評価を行わないよう努め

る態度や信念が実験Ⅱの結果に影響した可能性も考えられる。一方で、本研究は都内の女子大学に通う大学生を対象に実施したものであり、実験協力者たちはいずれも「若年女性」に分類される性別・年齢であったことについても考慮する必要がある。すなわち、「麻衣」という名前に対して職業的専門性が低いと感じながらも、自らと同じ属性を持ち合わせていることによる好意的感情から、説得力得点の低下が抑制されたのかもしれない。

以上より、本研究の実験協力者である女子大学生らは「(高齢)女性は優しく共感的である」といったジェンダー・ステレオタイプに基づく評価は行っていた一方で、男性の優位性をその能力の高さに結びつけるようなジェンダー・ステレオタイプに基づく評価は行わなかったことが示唆されたといえる。では、なぜ前者は評価に影響し、後者は影響しなかったのか、これには大きく3つの理由が考えられる。

1つ目に「女性は優しく共感的である」といった類のジェンダー・ステレオタイプは信念化されやすいことが挙げられる。ステレオタイプ知識の活性による自動的過程と個人的信念の活用による統制的過程を区別した Devine (1989) は、信念とは真実であるとして支持され受け入れられている命題であると定義した。一般に、ジェンダー・ステレオタイプ及び性役割が規範性を帯びやすいことには、それらが究極的には生殖機能の差異に根差していることが影響すると考えられている (土肥, 2008; Wood & Eagly, 2012)。このとき、女性に共同性を付与するようなジェンダー・ステレオタイプは、生殖機能上の女性の役割をより直接的に反映した内容であるため、真実として受け入れられやすいことが窺える。

2つ目に、敵意的な表出を伴わないために問題意識を抱きにくいことが挙げられる。両面価値的性差別主義理論において、支配的家父長主義・侮辱的な信念・異性への敵意を伴う敵意的性差別に対し、好意的性差別は、保護的家父長主義・女性の理想化・親密な関係の欲求を含むとされる (Glick & Fiske, 1997)。女性を共同的な特性を備える存在として高く評価することは、まさに女性の理想化と言える。しかし、それは主観的には肯定的な態度であるために、性別間の非対称的構造を正当化する機能を持つことに行方者自身は気づかず、性差別は良くないことであると思っていたとしても、その意識的統制の対象となりにくいことが推察される。

3つ目に、性別役割分業の形態の変化が関係していると考えられる。日本では、1990年代を境に、男性の雇用の不安定化やサービス産業の発展により、女性の雇用が加速したことで、1997年以降は共働き世帯数が専業主婦世帯数を継続的に上回るようになり (鈴木, 2017)、女性の年齢階級別労働力率の描くM字カーブの底も年々ゆるやかになっていることが知られている。しかし、なおも、女性が1日あたりに日常の家事や世帯員へのケアなどを含む無償労働に従事している時間 (224.3分) は男性 (40.8分) の約5.5倍であり (OECD.Stat, 2021)、「家庭の仕事」は女性に強く紐づけられた役割であり続けている。このように、他者をケアする役割が妻や母などの女性のみによって担われる状況は「ケアの女性化」と呼ばれ、特に日本において顕著な現象であるとされる (柏木, 2016)。男性のみが生産労働を担い、女性は再生産労働のみに従事すべきという形態での性別役割分業は見られなくなったが、再生産労働はあくまで女性のみが担うもので、男性は生産労働のみに従事していればよいという新たな形態での性別役割分業が生じていると考えられる。

これらをジェンダー・ステレオタイプの「活性」と「適用」、「知識」と「支持」の観点から整理するとき、女性に共同的特性を求めるジェンダー・ステレオタイプは、その生物学的な実態を伴う

根拠から真実として支持されやすく、かつ、好意的な表出によって意識的統制の対象になることもなく適用され続ける一方、ケアの女性化と呼べるような現状の観察から、女性とケア役割を結びつけるジェンダー・ステレオタイプ知識は日々共有（活性）され続けていくという、現代社会において非対称的構造が維持される要因が垣間見える。

上記のように、現代社会が抱える性別間の非対称的構造の理解に寄与する結果を得た点において、本研究の知見は興味深い。しかし、本研究において使用した名前は年代ごとの人気ランキングに基づくものとはいえ、性別と年齢の印象のみを問う事前調査によって決定されたものであり、Kasof(1993)が指摘するような魅力度などの統制は不十分であったとも考えられる。また、本研究はいずれも、都内の女子大学に在学し、心理学を専攻する学生のみを対象として行ったものであり、実験協力者の属性や本来的な興味及び専門性の偏りといった要素が結果に影響していた可能性も排除できない。したがって、事前調査などの手続きによって、使用する課題文と名前の統制を十分に行ったうえで、より広い対象での検討を行っていくことが今後の課題である。

文献

- 青野 篤子 (2022). 性差・性別役割 日本発達心理学会 (編)高橋恵子・大野祥子・渡邊寛 (責任編集)発達科学ハンドブック 11 ジェンダーの発達科学 (pp.39-67)新曜社
- Devine, P. G. (1989). Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of personality and social psychology*, 56(1), 5. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.56.1.5>
- 土肥 伊都子 (2008). 女性と男性のステレオタイプ 青野篤子・赤澤淳子・松並知子 (編) ジェンダーの心理学ハンドブック (pp.97-111) ナカニシヤ出版
- Eagly, A. H., & Mladinic, A. (1989). Gender stereotypes and attitudes toward women and men. *Personality and social psychology bulletin*, 15(4), 543-558. <https://doi.org/10.1177/01461672891540>
- Eagly, A. H., & Mladinic, A. (1994). Are people prejudiced against women? Some answers from research on attitudes, gender stereotypes, and judgments of competence. *European review of social psychology*, 5(1), 1-35. <https://doi.org/10.1080/14792779543000002>
- Eagly, A. H., & Steffen, V. J. (1984). Gender stereotypes stem from the distribution of women and men into social roles. *Journal of personality and social psychology*, 46(4), 735. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.46.4.735>
- Eagly, A. H., & Wood, W. (2012). Social role theory. In P. van Lange, A. Kruglanski, & E. T. Higgins (Eds.), *Handbook of theories in social psychology* (pp. 458-476). Los Angeles: SAGE Publishing
- Glick, P., & Fiske, S. T. (1997). Hostile and benevolent sexism: Measuring ambivalent sexist attitudes toward women. *Psychology of women quarterly*, 21(1), 119-135. <https://doi.org/10.1111/j.1471-6402.1997.tb00104.x>
- Goldberg, P.A. (1968). Are women prejudiced against women?. *Trans-action*, 5(5), 28-30. <https://doi.org/10.1007/BF03180445>
- Golombok, S., & Fivush, R. (1994). *Gender development*. New York : Cambridge University Press (ゴロンボク, S.・フィバッシュ, R. 小林 芳郎・瀧野 揚三 (訳) (1997)。ジェンダーの発達心理学 田研出版)
- Horowitz, E. L., & Horowitz, R. E. (1938). Development of social attitudes in children. *Sociometry*, 301-338. <https://doi.org/10.2307/2785586>
- 上瀬 由美子 (2002). ステレオタイプの社会心理学－偏見の解消に向けて－ サイエンス社
- 柏木 恵子 (2016). 人口の心理学の視点－命と死と生涯発達－ 柏木恵子・高橋恵子 (編) 人口の心理学へ：少子高齢社会の命と心 (pp.1-29) ちとせプレス
- Kasof, J. (1993). Sex bias in the naming of stimulus persons. *Psychological bulletin*, 113(1), 140. <https://doi.org/10.1037/0033-2909.113.1.140>
- 川岸 克己 (2013). 人名における漢字使用の変化とその誘因. 安田女子大学紀要, 41, 1-14.
- Klaas, E., & Boukes, M. (2020). A woman's got to write what a woman's got to write: the effect of journalist's

- gender on the perceived credibility of news articles. *Feminist Media Studies*, 1-17. <https://doi.org/10.1080/14680777.2020.1838596>
- Kohlberg, L. (1966). A cognitive developmental analysis of children's sex-role concepts and attitudes. In E. E. Maccoby (ed.), *The development of sex differences*. Stanford, CA: Stanford University Press. pp. 82-172.
- (コールバーグ, L. 青木 やよひ・池上 千寿子・河野 貴代実・深尾 凱子・山口良枝 (訳) (1979). 子供は性別役割をどのように認知し発達させるか マッコビー, E.E. (編) 性差—その役割と起源 家政教育社 pp.131-254)
- 厚生労働省 (2013). 日本の雇用システムと今後の課題 平成25年版 労働経済の分析—構造変化の中での雇用・人材と働き方. Retrieved December 12, 2021 from <https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/roudou/13/13-1.html>
- 文部科学省 (2019). 学校教員統計調査—令和元年度(確定値)結果の報告—. Retrieved December 12, 2021 from https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kyouin/kekka/k_detail/1395309_00001.htm
- 森永 康子 (2017). 「女性に数学が苦手」—ステレオタイプの影響について考える— 心理学評論, 60(1), 49-61. https://doi.org/10.24602/sjpr.60.1_49
- 野寺 綾・唐沢 かおり (2004). 性別と男女平等主義的態度がジェンダーステレオタイプ活性におよぼす影響. 人間環境学研究, 2, 9-14. https://doi.org/10.4189/shes.2.2_9
- OECD.Stat (2021). Employment : Time spent in paid and unpaid work, by sex. Retrieved December 8, 2021 from <https://stats.oecd.org/index.aspx?queryid=54757>
- 相良順子 (2008). 幼児・児童期のジェンダー化 青野篤子・赤澤淳子・松並知子 (編) ジェンダーの心理学ハンドブック (pp.1-19) ナカニシヤ出版
- 佐々木淳 (2015). 心的外傷後ストレス障害の理解と支援 丹野義彦・石垣琢磨・毛利伊吹・佐々木淳・杉山明子 (編) 臨床心理学 (pp.496-509) 有斐閣
- 世界経済フォーラム (2021). Global gender gap report 2021. Retrieved July 10, 2021, from <https://jp.weforum.org/publications/global-gender-gap-report-2021/>
- Serbin, L. A., & Sprafkin, C. (1986). The salience of gender and the process of sex typing in three-to seven-year-old children. *Child Development*, 1188-1199. <https://doi.org/10.2307/1130442>
- Signorella, M. L., Bigler, R. S., & Liben, L. S. (1993). Developmental differences in children's gender schemata about others: A meta-analytic review. *Developmental review*, 13(2), 147-183. <https://doi.org/10.1006/drev.1993.1007>
- 総務省統計局 (2014). 統計トピックスNo.80 我が国の科学技術を支える女性研究者—科学技術週間にちなんで— Retrieved June 30, 2021 from <https://www.stat.go.jp/data/kagaku/kekka/topics/topics80.html>
- 鈴木 淳子 (2017). ジェンダー役割不平等のメカニズム—職場と家庭— 心理学評論, 60(1), 62-80. https://doi.org/10.24602/sjpr.60.1_62
- 鈴木 淳子・柏木 恵子 (2006). ジェンダーの心理学—心と行動への新しい視座— 培風館
- Swim, J., Borgida, E., Maruyama, G., & Myers, D. G. (1989). Joan McKay versus John McKay: Do gender stereotypes bias evaluations?. *Psychological Bulletin*, 105(3), 409. <https://doi.org/10.1037/0033-2909.105.3.409>
- Uhlmann, E. L., & Cohen, G. L. (2005). Constructed criteria: Redefining merit to justify discrimination. *Psychological Science*, 16(6), 474-480. <https://doi.org/10.1111/j.0956-7976.2005.01559.x>
- Wood, L. A., Hutchison, J., Aitken, M., & Cunningham, S. J. (2022). Gender stereotypes in UK children and adolescents: Changing patterns of knowledge and endorsement. *British Journal of social psychology*, 61(3), 768-789. <https://doi.org/10.1111/bjso.12510>
- Wood, W., & Eagly, A. H. (2012). Biosocial construction of sex differences and similarities in behavior. *Advances in experimental social psychology*, 46, 55-123. (Vol. 46, pp. 55-123). Academic Press. <https://doi.org/10.1016/>